

## 詩作の心

**福田** 小野先生が、童謡の詩を書こうと思ったきっかけは何ですか？

**小野** これまで28年間幼児教室にたずさわっていますが、子どもたちといっしょにしていると詩を書こうという気持ちになるんです。子どもの世界は詩の世界そのものなんです。何も飾ったところがなくて、それでいて美しい。絵でも言葉でも、子どもたちのイキイキした個性あふれる表現にふれると、大人の私も心が洗われて、詩や絵をかこうという気に自然になるんです。

**五十野** 自分のお子さんとのふれあいから生まれた詩もあるんでしょうか？

**小野** ええ、いくつかあります。長女の貴子が4歳のころ、自分のかいた絵を見せながら、「メチャクチャがえる」と言ったんです。私はふしぎな感動を覚えました。子どもがかいたかえるはメチャクチャでも画用紙の上で生きているように見えたんです。今にも飛び出しそうな勢いが感じられました。わたしはすぐに「メチャクチャがえる」という詩を書きました。

「ふしぎだね」も子どもの絵に感動して書いた詩です。「おもちだいすき」は貴子と長男の和俊のお正月の作品です。

**安尾** 小野先生の童謡集の中には、花を歌う作品も多いようですね。何か花に対して、特別な気持ちをお持ちなんですか？

**小野** もともと、四季折々に咲く花が好きなんです。毎年五月初めに、歌人の相原法則さんのご自宅で開かれるボタンの会に、児童文学作家の松谷みよ子さん、岩崎京子さん、宮川ひろさんとごいっしょにお招きいただいて、本当にボタンの花が好きになりました。相原さんのお宅のボタンが大きくきれいなので、自分の家の庭にもボタンをうえたほどです。横山大観のボタンの絵もいいし、庭に咲くボタンの花も大好きです。

それと同時に道ばたや野原に咲くタンポポの花も大好きなんです。ボタンが大人の花だとするとタンポポは子どものようにかわいらしい花です。タンポポは、風といっしょに、歌ったり遊んだり、小さいのに、大きな夢をみているような気がするんです。タンポポを見ると、夢いっぱいの子どもの時代を思い出します。

もともと今でも夢いっぱいなんです。(笑)

**渡辺** さくらの花の歌も多いように思いますが。何か深い思いがあるんですか。

**小野** 父がさくらが大好きで、四月になるとよく家族でお花見に行きました。広尾の自宅から上野動物園へお花見に毎年行ったものです。ある年は雨がふる中、カサをさしてお花見にも行きました。映画のニュースにも出たんです。(笑)

**安尾** そういえば昔は映画の前にニュースをやっていたものね。

**小野** 私の父は、郵政省の役人だったんですが、教育にも熱心で季節感を大切にしていま

した。四月のお花見を欠かさなかったように、七月には七夕飾りを、八月には家族で海水浴に行き、九月にはお月見をするというように、四季それぞれの美しさ、楽しさを教えてくれました。さくらの花には特に、家族ですごした時間、そのあたたかさを思い出させるものがありますね。



現在につけん本部のある国立市もさくらの花の名所のひとつですが、さくらの花が満開の日に、花びらがひらひら舞っていて、そこで子どもたちが、かけっこしたりスキップしたり、詩の世界のように美しい光景で、ふと我を忘れてみとれてしまうんです。そんなときできたのが「さくらの花びら」です。見たままをそのとおりに書いていただけなんです。

「メチャクチャがえる」は子どもとのふれあいから生まれた

花は、見る人の心をなぐさめ、あたたかくします。そういった点で、何か愛の象徴のように思うんです。花の歌が多いのは、そうした私の考えの反映だと思います。

**五十野** 小野先生の奥様も、幼児教育を勉強なさった方だとうかがいました。小野先生の創作には、奥様のご助力もあるのでしょうか。

**小野** 家内の節子は、大学の同級生ですが、卒業後イギリスに渡り、2年間幼児教育の先駆者マリア・モンテッソーリの勉強をしていたんです。同級生どうしが偶然、幼児教育の道を歩んでいたんですね。教育のこと、童謡づくりのこと、なんでも相談にのってもらっています。

**安尾** につけん子どもたちに詩を読んできかせることもありますか？

**小野** ええ。子どもは、詩の意味よりも、言葉のひびきやリズムの美しさにひかれることが多いように思います。子どもたちの反応を見て詩を書きなおすこともときにはあります。渡辺先生に作曲していただいた童謡を、子どもたちと歌ってみて、詩をなおすこともあるんですよ。何しろ童謡集の本として出版するまでは、なおせるんですから。(笑)

もともと、「ぞうさん」の詩で有名な、まど・みちおさんに先日お会いしたのですが、まどさんは「本になった後でもなおすことがある」とおっしゃっていました。それを聞いて私はほっとしました。

**渡辺** 小野先生の詩は、素朴で、ほのぼのとしたあたたかさが感じられるものが多いように思いますが、どんなお気持ちで書かれるんですか。

**小野** 私は、につけんの先生方と、『古事記』の歌の勉強会を開いております。10年ほど前に、童謡をつくろうと思ったときに、日本人の心の原点ともいえる『古事記』の歌の心が知りたくなったんです。『古事記』の歌は簡明、率直であり、単純素朴でありながら、魂をゆさぶるような力強い歌が多いように思います。

『古今集』の序で、紀貫之が「力をも入れずして、天地（あめつち）を動かし」と和歌



のことをいっていますが、私も「力を入れなくても、子どもの心にひびく」ような童謡がつくれたらと思っています。

**五十野** 小野先生は詩の翻訳もなさっていらっしゃるんですね。その影響はどうでしょうか？

**小野** 友人で詩人の相磯裕先生、加賀野井秀一先生、橋本喬木先生、武山智先生とスチーブンスンの『子どもの詩の庭』や『マザーグース』の勉強をしていますが、リズムや韻の美しさ、発想の面白さなど参考になることがたくさんあります。

**五十野** 小野先生の教育理念の中には「人間愛にあふれた国際

**五十野 惇氏** 人の育成」とありますが、童謡においても同じでしょうか。

**小野** ルソーは『エミール』の中で、人間愛の重要性をとناえています。私も子どもの心に、夢や喜び、愛の心をはぐくむような童謡をつくりたいと願っています。

大学時代は、兄が京都に住んでいましたので、たびたび行って、東寺などの仏像を見て歩きました。仏像を見ているとなぜか心が落ち着くんですね。

ここ数年の間に家内や友人と西国三十三観音巡礼、坂東三十三観音巡礼、秩父三十四観音巡礼、四国八十八霊場めぐりなどをしてきました。

「母親がわが子を生命をかけて守るように、すべてのものに対して、慈悲の心を持ちなさい」というブッタの慈悲心、「親（神）が子（人間）に対する親ごころ、子が親に対する子ごころ」というスイスの教育者ペスタロッチの愛の思想を、もし童謡で子どもたちに少しでも伝えることができれば、心の教育という点で、すばらしいことだと思います。

**五十野** 小野先生の卒業論文は『聖書と教育学』でしたね。

**小野** 「愛は人間を育てる」という私の教育論を聖書の話から展開していったんです。子どもへの深い愛が、子どもを人間として大きく成長させると思うんです。愛は奇跡をもたらす“心のパン”で、いつも心を満たしてくれるんですね。

大学時代には麻布の教会にもよく行きました。「神は愛なり」という言葉が大好きで、賛美歌もよく歌いました。

**五十野** 小野先生はお茶や書など多くの趣味をお持ちですが、そうした世界の広さも童謡づくりに役立っているんでしょうね。

**小野** お茶や書や油絵が好きで、自分のペースでのんびりと学んでいます。たんなる趣味にすぎませんが、学んでいるときの自由な気持ちは、童謡づくりに通じるものがあるかもしれません。

**五十野** 小野先生の『平成の万葉童謡集』は、20名近い作曲家の先生方によって作曲されたそうですね。

**小野** ええ。多くの情熱ある作曲家の先生方が作曲してくださいました。そのうえ、コンサートも開いていただいて。子どもたちが喜んで歌っているようで、こんなにうれしいこと

はありません。コンサートの招待状をいただいて、家内と何回か聞きに行きましたが、家内はコーラスのグループにも入っていて、歌を聞くのも、歌うのも好きで喜んでくれているようです。